

親子で楽しむ町内の文化財 ～ パートⅢ ～

「歴史の宝宝箱」播磨町。身近なところに、地域の人びとが大切に受け継いできた貴重な文化財があります。

【問い合わせ】郷土資料館 ☎079(435)5000



播磨町マスコットキャラクター
いせきくん、やよいちゃん

11 無量寿院の石灯籠

今月は無量寿院にある石灯籠を紹介します。



▲お礼の心が一つの形となって

【クイズ】

「灯籠」とは本来はなんのために使うものでしょう。

- ① お礼を燃やすため
- ② 仏様に浄火を捧げるため
- ③ 足もとを照らすため



無量寿院の本堂の前で手を合わせた後、左右に目を向けると一対の石灯籠があります。よく見ると普通の石灯籠と、どこか違うところを感じます。

石灯籠のつくりは、一番下に「基壇」といわれる石の台が埋められています。その上に長細く伸びる「竿」が乗り、それから、少し広がる「中台」、そして火が入る「火袋」が置かれ、次に屋根のような「笠」がきて、一番上に「宝珠」があります。

さて、この石灯籠の場合、「竿」の部分が四角柱となっているのが珍しいのです。普通は節のある円柱となります。なぜ四角柱となったのかはよくわかりませんが、なにかの転用かともいわれています。

さらに、この灯籠の場合、一対の内、向かって左には「寛文四年（一六六四）の年号が刻まれています。江戸時代初期にあたり、町内で記録のある灯籠の中では一番古いものです。お寺の歴史を感じます。

灯籠の歴史は、仏教の歴史の中で語られますが、日本最古のものは、奈良時代前期の当麻寺のもので、それは、昼間の法会（え）のとき、仏様に浄火を捧げるために、本堂の正面につくられました。時とともに変化して、室町時代になると、左右一対でつくられるようになります。一方、神前用もでき、神社にも立てられるようになります。そして、江戸時代になると、庭にも置き始め、足もとを照らす実用品となっていきます。

あらためて、無量寿院の石灯籠を見ると、このお寺がいかに古くから多くの人びとの願いをかなえてきたかがよくわかります。
(郷土資料館 館長 田井恭一)

■ クイズの答 ② 仏様に浄火を捧げるため



町の人口 1月1日現在 (住民基本台帳人口+外国籍人口)
 34,186人(+3人) 男…16,796人(+3人) 世帯数…13,508(+2)
 女…17,390人(±0人)